



Weekly Market Report

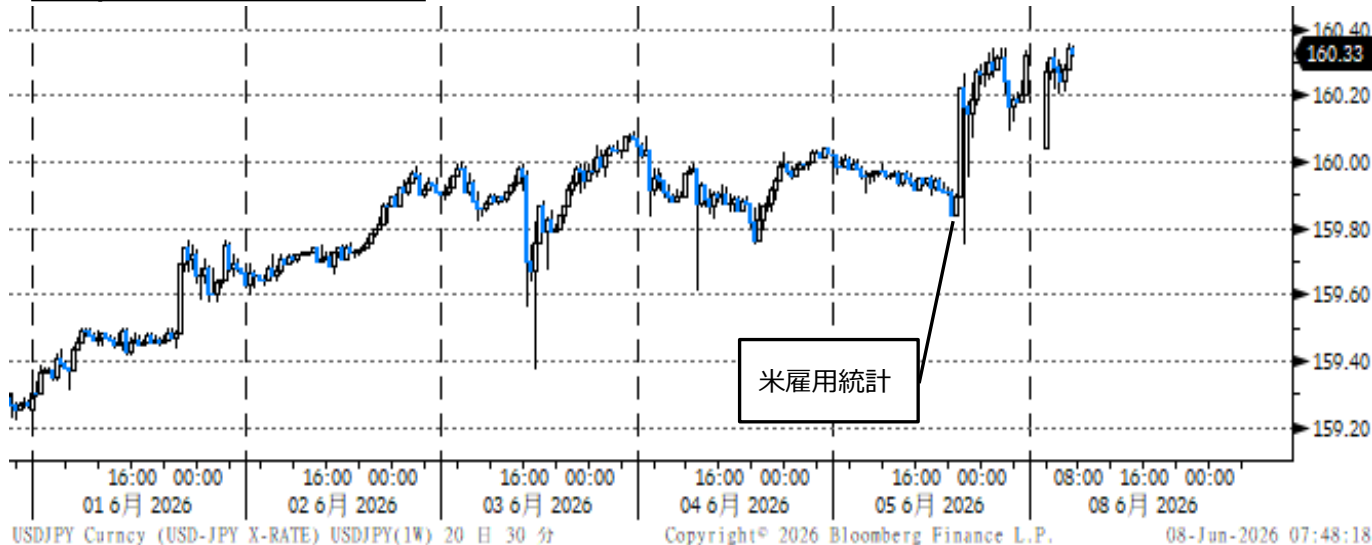
Jun 8, 2026

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

先週の米ドル円相場は160.30円台まで円安進行。重要イベントを前に161円台トライなるか。

USD/JPY (1週間の値動き)



コメント

先週の米ドル円相場は週末に円安進行し、1米ドル160.30円台まで上昇した。週前半は中東情勢を巡る先行き不透明感から「有事のドル買い」が優勢となる場面が見られたが、為替介入への警戒感が上値を抑え、159円台後半にて米雇用統計の結果を待つ展開となった。週後半に発表された米雇用統計は市場予想を上回る強い結果となり、FRBによる年内利上げ観測が高まったことで、160.30円台まで上昇した。足元ドル円が160円を超えてくると為替介入への警戒感が一段と高まりやすく、日本当局によるヘッドラインには要注意。今週は中東情勢及び次週に控える日米金融政策決定会合を巡って神経質な展開が予想される。目先は米国消費者物価指数（コアCPI）にて強い結果が示されれば、ドル円相場は161円台が意識される局面も視野に入るだろう。（市場営業部/下出）

今週の経済指標（予定）

日付	イベント	予想
6/8(月)	(日本) 1Q実質GDP（前期比年率）	1.4%
6/9(火)	(米国) 貿易収支	-555 億ドル
6/10(水)	(米国) 消費者物価指数（コアCPI）	2.9%
6/11(木)	(欧州) ECB政策金利	2.4%
6/12(金)	(米国) ミシガン大学消費者信頼感指数	46.0

USD/JPY (5年間)



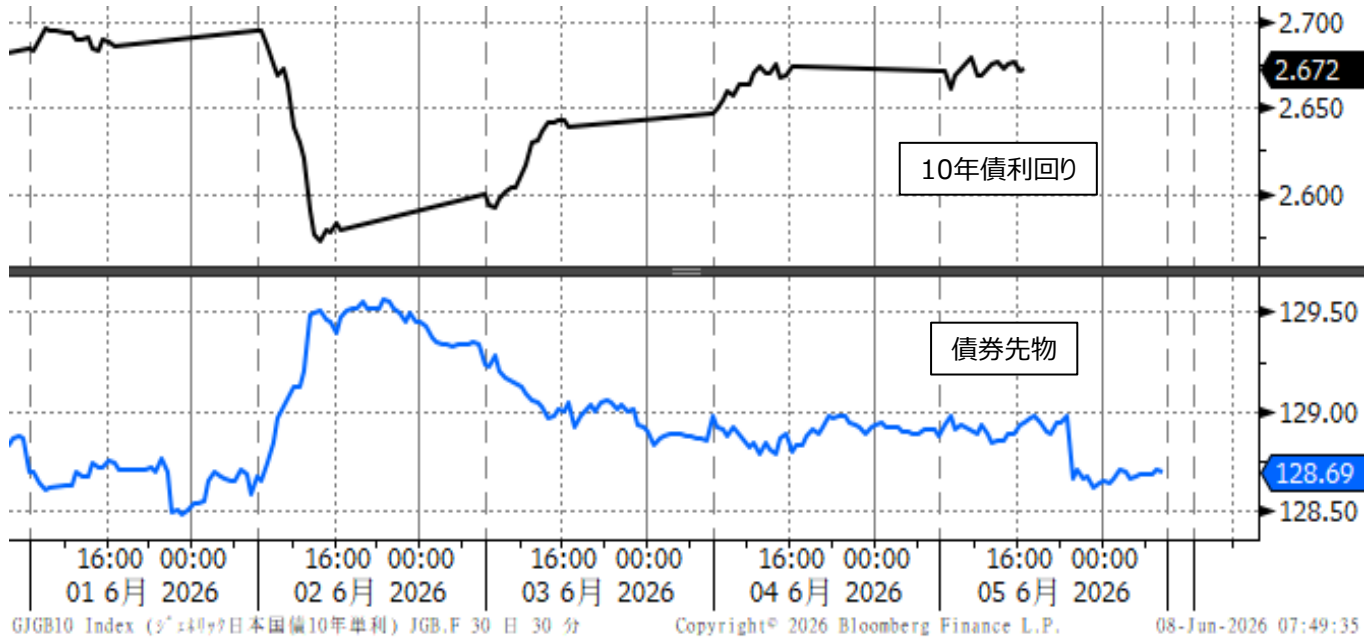
今週のレンジ予想（USD/JPY）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
森本泉貴	158.00 – 161.00	介入警戒感が強いいため上値は重い展開が続くと予想するが、米CPIの結果次第ではドル買いに動かしが注目。
松榮俊樹	157.50 – 161.00	160円を突破したことにより再び為替介入の警戒感が高まる。一先ずBOJ・FOMCまでは引き続き上値が重い展開続くか。

2. 円金利相場概況

強い入札結果も束の間、金利は週間でほぼ行って来い

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



コメント

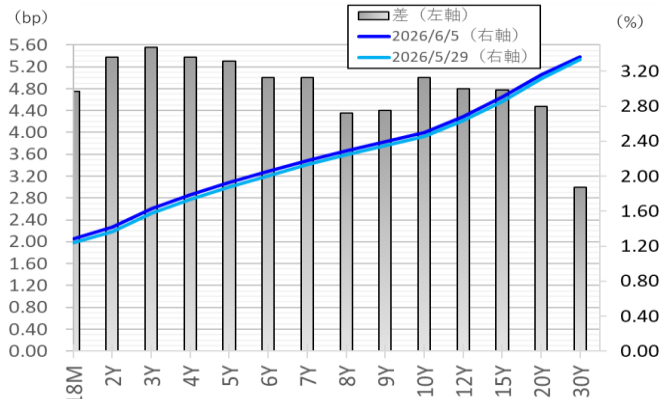
(出所) Bloomberg

先週のJGB市場は、週末の中東和平交渉に進展がない中、金利が小幅上昇でスタート。その後は翌日の10年債入札を抑えた事前調整の売りが優勢となった。火曜日は、前場から入札への先回り買いが活発。午後の10年債入札が市場予想を上回る好調な結果となったことで、後場はそれまでショートポジションだった投資家の買い戻しが一気に加速し、金利は週間最大の低下幅となった。水曜日は前日の急落に対する戻り売りが優勢となり金利は大きく反発。木曜日は前日に公表された植田総裁のタカ派的な講演の余韻や、超長期債の流動性供給入札が弱い結果に終わったことも重なり金利は続伸した。金曜日は週末の米雇用統計を前に方向感を欠き、ほぼ横ばいで週の取引を終えた。

今週は水曜日に30年債入札、木曜日に日銀の国債買入オペが予定されている。6月15～16日の日銀会合に向けて利上げはほぼ織り込み済み。会合でのコミュニケーションがハト派的と受け止められた場合、カーブのスティープ化圧力が強まる可能性には引き続き注意したい。

(市場商品部/金利G)

金利スワップ変化（1週間）



10年円金利スワップ推移（5年間）

(%)



(出所) Bloomberg

今週のレンジ予想（10年国債利回り）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
加藤里奈	2.65% - 2.80%	中東情勢が不透明な状況の中、日銀利上げ観測が一段と高まったことで、金利は上昇しやすい展開と予想。
遠藤風翔	2.60% - 2.80%	今月会合での利上げが確実視される中で、短年限中心に金利上昇となる展開を予想。

3. 今週のトピックス

FRBの今後の政策

ウォーシュ新FRB議長と米国金融政策の見通しについて

足元の為替市場では、FRBの新議長に就任したケビン・ウォーシュ氏の金融政策スタンスが大きな注目を集めている。イラン情勢悪化以前では、2026年後半に向けて追加利下げシナリオが市場見通しの中心であったが、直近では米インフレ指標の上振れを背景に、利上げ観測が再び意識されている。本稿ではFRBの今後の金融政策について整理したい。

<利上げ観測材料>

利上げ観測を支えている最大の要因は、米インフレ率の高止まりである。2026年4月の米CPIは前年比+3.8%となり、市場予想を上回った。また、サービス価格や賃金上昇圧力も依然として強く、FRBが重視するコアPCEについても2%目標を大きく上回る状況が続いている【図1】。

加えて、中東情勢悪化による原油価格上昇もインフレ再燃リスクとして警戒されている。エネルギー価格や物流コスト上昇から、今後のインフレ鈍化シナリオが後退しつつあり、米10年債利回りも4.5%近辺まで上昇している。

さらに、ウォーシュFRB新議長は就任前から「FRBはインフレ対応に失敗した」と繰り返し主張しており、市場では「パウエル前議長以上にインフレ抑制を重視する」との見方が強い。特にウォーシュ議長はインフレの上昇を強く警戒しているとみられており、インフレが再加速した場合には、利上げに踏み切る可能性も完全には否定できない。

<利下げ観測材料>

一方、市場では依然として利下げ観測も残っている。最大の理由は、米景気減速懸念である。長引く米金利の高止まりによって企業活動や消費への悪影響が徐々に表れ始めており、一部米経済指標には鈍化傾向も見られる。

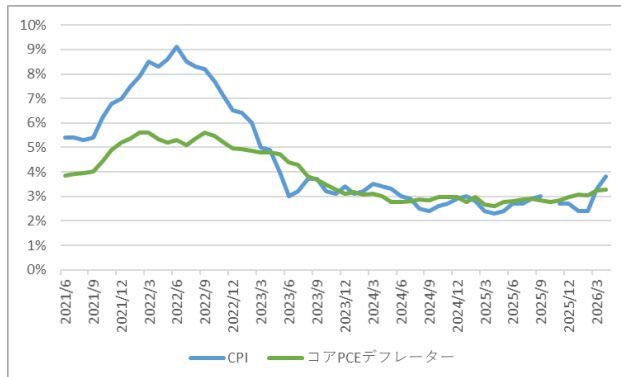
また、ウォーシュ議長が重視するとされる「トリム平均PCEインフレ率」は2%台前半まで低下しており、基調インフレは既に落ち着きつつあるとの見方も存在する。市場では、「現在のインフレ上昇は原油高など一時的要因が中心であり、景気減速が進めば自然にインフレも低下する」との意見も少なくない【図2】。

さらに、市場が注目しているのが、トランプ米大統領とウォーシュ議長の関係性である。トランプ大統領は以前から「高金利は米経済の重荷になる」としてFRBの金融引き締めを批判的な姿勢を示しており、景気重視の観点から利下げを求める傾向が強い。ウォーシュ議長は政権との距離が比較的近いとみられていることから、市場では「景気減速が鮮明となった場合、政権側の意向も踏まえ、FRBが想定より早期に利下げへ転換する可能性がある」との見方も一部で浮上している。

<今後のFRB金融政策とドル円>

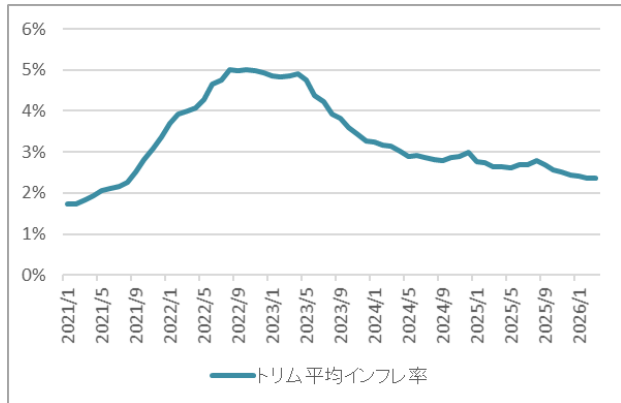
次回FOMCは、ウォーシュ議長就任後初会合となるため、発言内容への注目度は非常に高い。ウォーシュ議長の量的金融政策に対してのタカ派姿勢を背景にドル円は底堅い一方、景気減速や利下げ観測が強まれば、ドル円が反落する可能性もあることに注意したい【図3】。(市場営業部 川上)

【図1】米CPIとコアPCEデフレーター



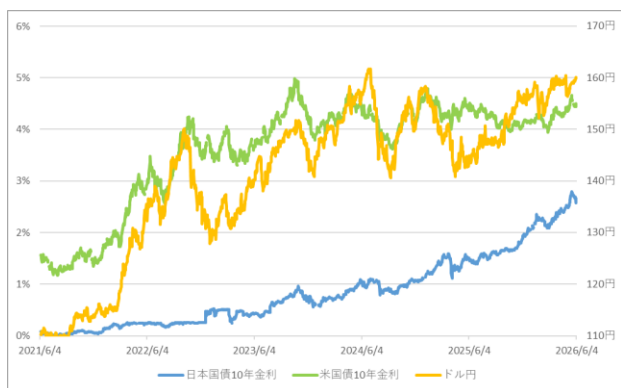
(出所：米国労働統計局と米国経済分析局のデータに基づきあおぞら銀行作成)

【図2】トリム平均PCEインフレ率



(出所：ダラス連銀のデータに基づきあおぞら銀行作成)

【図3】日米金利差とドル円の推移



(出所：Bloombergのデータに基づきあおぞら銀行作成)

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会